

## 2024. 9. 14 自然な異年齢での関わりとそれを支えるもの

夏休み明けからの保育を見ていると、特に好きな遊びの中での異年齢の交わりが多いように感じます。

年長の保育室では、年長児らが捕まえたバッタやトンボを飼育している大きな虫かごに、年中児の虫好きな子たちがよく遊びにきています。虫メガネでバッタを見てみたり、ライトで当てて観察したり。「(年中) あのバッタ、めっちゃおっきい！どこにいたの？」「(年長) あそこのテニスコートにいたよ！」「(年中) えー、ぼくも捕まえてみたいなー」などのやりとりも聞こえてきます。そして、「トンボ捕まえたんだ！」と虫かごにに入れて持ってきた年中さんは、年長保育室の生き物コーナーの「トンボ博物館」(亡くなったトンボを年長児らのアイデアで昆虫採集のように掲示したもの)を見ながら、「これはやっぱギンヤンマだね」と確認している姿もありました。年長の宝石作りのコーナーでは、アルミ箔を金づちで叩き、宝石状にしてからキラキラ折り紙をつけていくのですが、年少の女の子たちがそれを真剣な表情で見えています。

金づちで叩こうとする年少さんもありますが、少し危ないと感じた年長さんが「ちょっと待ってて、今作ってあげるから！」と作った指輪を付けてあげている様子も見られます。もらった年少の女の子はとても嬉しそうでした。その他にもいろいろな場所で、いろいろな遊びで異年齢での関わりが見られます。

年長児が年中保育室へいき、スライム作りを楽しんでいます。作ったスライムを年長保育室前のライトテーブルで年中長の女兒たちがその透け感を楽しんでいます。

遊戯室では、年中、年長混じってドンジャンけんを楽しんでいます。年長のかき氷屋さんやコンビニにお客さんとして年中、年少さんたちが来てくれます。廊下では、年長のドキュメンテーションを見ている年中さんの姿も見られます。

年少さんで言えば、園生活にもすっかり慣れ、自分の居場所ができ、安心感のもと、外の世界へ繰り出しているのかもしれませんが。そこで得た新たな刺激、世界がまた学年に戻って、新たな遊びへと広がっていくこともあるのでしょうか。

逆に、朝不安げに登園してきた年少さんが、先生と一緒に年長の生き物コーナーでカメに餌をあげている間に笑顔に変わっていく様子も最近見られました。違う部屋での新たな出会いが安心感をもたらすこともあるのかもしれません。

人との関わりだけでなく、園全体が自分の居場所となっていく。

そこで、新たな出会いがあり、人との関わりがあり、新たな好きがうまれるののかもしれません。

その姿を支える要因の一つとして、保育者間での共有があると思います。

昨日の放課後、金曜カンファレンスが行われましたが、そこではそれぞれの最近の遊びの様子を共有し、さらにそれを受けての新たな気付きや思いを伝え合っていきます。職員室での普段の会話の中でも共有しますが、画像を通して、じっくりと語り合います。

お互いの育ちを保育者間で分かち合いながら、子供たち全員を園全体として支えていく。学年を超えて遊びを保障していく。今年度は他園の先生方もこの会に参加してくれていますが、このように保育者集団としても自然な異学年での関わりを大切にしていきたいと思います。



